

新 潮 文 庫

チンネの裁き
消えたシュプール

新 田 次 郎 著



新 潮 社



きばのネのチ
き消えたシュプール

定価はカバーに表
示してあります。

新潮文庫 草122 F

昭和四十九年十一月二十六日 発行
昭和四十九年十二月三十日 二刷

著 者 新 田 次 郎

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 新 潮 社

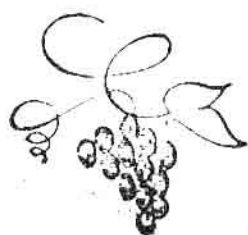
郵便 番号 一六二
東京 都 新宿 区 矢来 町 七 一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一一
編集部(〇三)(二六六)五四二
振替 東京 四一八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

チ ン ネ の 裁 き
消えたシュプール

新 田 次 郎 著



目次

チンネの裁き	七
錆びたピッケル	三三
新雪なだれ	二六七
消えたシユプール	二五三

解説 荒正人

チンネの裁き・消えたシユプール

チンネの裁き

チンネ(Zinne)とは、山言葉で、巨大な岩壁をもつ尖塔状の岩峰を意味する。イタリアでは、コルチナ北東のドライ・チンネが有名だが、わが国では北アルプスの雄峰、剣岳の三の窓にそびえる岩峰をいう固有名詞になっている。この岩峰は、一木一草もよせつけぬ約三百メートルの高さのもので、わが国屈指の優れた岩場として知られている。

第一章 落 石

1

音は遠雷の響きに似ていた。音源のはっきりしない範囲の空間で反響し合う音だった。

木塚健の岩に伸した右手が元にもどった。彼は登攀の行動を一時停止して音に耳をそばだてた。続いて轟音が起った。池の谷左俣の峡谷に起ったものすごい音響だった。首だけを動かしたが、谷はよく見えなかった。足場と手掛りは彼をその岩場にかろうじて止らせているのに過ぎず、それ以上、身を動かすことは許されなかった。

彼はザイルのトップだった。後には寺林百平と京松弘がいた。中間の寺林と最後の京松はそれぞれ身を岩場に確保している筈だから、音は彼等のうち誰かのミスによって起ったものではな

いことが分っていた。

冷たい霧が頬を撫でて通った。木塚健は轟音が池の谷で起った落石によるものだろうと推察した。

木塚は落石の結果を見たかったが、そのままではどうにもならなかった。彼は岩にちゃんと止ったかたちのままで、眼の前の黒い岩肌を睨んでいた。

音はしばらく続いた。音がやむと、深夜のような静けさに返った。

「登るぞっ！」

木塚は中間の寺林百平に、そのまま前進して、岩棚に登りつめることを告げた。そこに立って、自らを確保し、後続する二人を待つつもりだった。池の谷に発生した落石の有無は岩棚で確かめるつもりだった。

岩棚を霧がかすめていた。霧の去来は絶間がなかった。濃淡のある霧で、ごく薄い時には、霧のベールを通してこれから登ろうとする長次郎頭に続く剣尾根の主稜が見えた。

木塚健は岩棚に自己の身体を確保してから、寺林に登ってこいと怒鳴った。ザイルをたぐり寄せながらも、池の谷の峡谷の下が気になった。よそ見をしてはいけなかったが、よそ見をした。霧は池の谷全体を掩っていた。

寺林は岩棚につくと直ぐ、

「おい木塚、ひどい落石があったな」

と言った。二人は最後の京松弘を待った。京松が三人のパーティーのリーダーだった。京松は

彼の持前の登攀速度よりずっと速く岩棚に取りつくど、

「あの落石なら、まず助かるまい」

とつぶやいた。

「誰か下に居たんですか」

木塚は、京松が池の谷の峡谷に登山者が居るのを、認めていたのだなと思った。

「いや、分らない、いたとしたらの話だ……」

池の谷左俣にはあまり人が入らなかった。居たとするより、居ない確率が高かった。三人は岩棚^{テラス}に腰をおろして、一息ついた。一しきり濃い霧が通り過ぎた後、突然霧が霽^はれた。霽れたというよりも切れ間が出来た。谷をへだてて小窓尾根と小窓頭^{がしら}が見えた。池の谷の底の霧はずっと薄くなり、突然切れて穴があいた。

雪溪の上に登山者の姿が見えた。一人が一人を介抱しているようにも見えるし、二人がかたまり合って倒れているようにも見えた。

「大声で呼んでみようか」

木塚がリーダーの京松に言った。

「よせ、落石がまた始まるといけない」

大声や物音が誘因になって落石が起る例はいくらでもあった。大きな声を出すのはこの場合、当然慎むべきであった。

「やっ！ 小窓頭にも人がいる」

京松は意外な発見にちょっと驚いたふうであったが、

「あいつは三の窓に向かって、急いでいるぞ、多分彼は三の窓から雪溪におりて行くつもりなんだな」

それから京松は木塚と寺林に向かって、

「こちらからも誰かが直ぐ行かねばなるまい」と言った。

「僕が行こう……」

木塚健がそうするのが当然のような顔をして、言った。彼は三人のパーティーのうちで、一番若くて、身軽だった。剣尾根の登攀のトップをやるだけの自信があるから、ドーム壁の岩をザイルで懸垂下降して池の谷の現場へ行くことなぞ、なんでもないことのように思っていた。

「責任上俺が行った方がいいが」

京松が言った。三人のパーティーのリーダーではあるが、落石事故とはなんの関係もなかった。責任上というのはおかしいし、いった方がいいというのは、行くつもりはないのだなど木塚は思っていた。

寺林は初めから行くつもりはないらしかった。彼は木塚と京松に等分に眼を配りながら、どちらでもいいから、さっさと決めてくれという態度だった。

木塚は下降の準備を始めた。懸垂下降で一気におりられる高さではないから、下降の前に、一応のルートの見当をつけておく必要があった。相変らず霧が邪魔だった。京松が捨て縄の準備を

してやりながら、

「よっく見て来てくれ、僕等は長次郎頭で君の来るのを待っている」

その声を聞きながら木塚はハーケンを岩に打ちこみ、捨て縄をかけた。

「行ってくるぜ、霧の霽れるのなんか待っちゃあられない」

木塚は大腿部^{だいたいぶ}にかけたザイルを肩に背負って言った。彼の鋏靴^{ナゲル}が岩を蹴^けった。寺林はいくらか微笑を浮かべて木塚を見送っていた。京松がひどく突きつめたような顔をしていた。懸垂下降をしていく、パーティーのリーダーにかわって、雪溪の上に起きた事故を見にいく木塚に向ける感謝の眼ではなかった。京松の眼はなにかを虞^{おそ}れていた。虞^{おそ}れているものを見にいく木塚に対して示す不安な色だった。

寺林百平は冷然としていた。大変なことが起ったようだが、俺は知らんぞといった顔で、ルックからカメラを出して、幾枚か写真を撮っていた。霧がまた視界をとじた。

木塚は案外楽な下降をした。雪溪を踏んでから、彼は霧の岩壁の上にいる京松と寺林に下へ無事降りたことを知らせてやりたかった。彼は、落石に注意しながら低く長く、岩に向かって叫んだ。上からは応答がなかった。雪溪の中央と思われるあたりから返事があった。調子はずれの声だった。

2

木塚健はザイルの束を肩にして、雪溪に足を踏み入れた。霧の中に人の動く気配があった。

雪溪にはおびただしい落石の跡があった。雪溪の中に半ば埋れている石もあった。落石した直後であったから、石の半面が霧に濡れずにあるものもあった。雪溪につけられた条痕は無数であった。すべて雪溪の中心に向けられてきざまれていた。

木塚は雪溪に一条の血を見て足を止めた。その先に二人の男がいた。

木塚は霧の中に向かって声を掛けた。一人がなにか言ったが、言葉にはならなかった。

落石は狭い雪溪の一部に向かって三方からなだれ落ちたものと見えた。落石にかこまれて、一人の男が倒れ、その傍に一人の男がしゃがんでいた。

「怪我は……」

木塚は覗きこんだ。倒れているのは死体だった。無慚な死に様だった。後頭部から血が吹き出していた。洋服は引きさかれ、ところどころに血がにじんでいた。アイゼンのひもは切れていた。「僕がこの男を殺した。蛭川繁夫は僕が殺したんだ」

雪溪に膝をついていた男が突然叫ぶように言った。

蛭川繁夫、木塚はその名を知っていた。既に名の通った若手のクライマーというよりも、最近編成を見たばかりのヒマラヤ遠征隊のリーダーとして知っていた。遠征隊は編成されたが資金の点で行き悩んでいた。ヒマラヤのジャヌー（七七一〇メートル）が彼等の目標だった。恐怖の峰として世界中に知れ渡り、おそらく現在の技術では当分の間は征服されないだろうというのが登山家の間の定説になっていた。フランス隊が撃退されたのもついこの間のことである。

「蛭川を殺したのは僕だ、ヒマラヤのジャヌー遠征を前にして蛭川を殺したのは僕の不注意だ」

た。ほんのひとかけらほどの浮き石が、僕の靴の下から転がり出した。それが落石の原因を作ったんだ」

「あなたの怪我は？」

同じパーティーだから当然、いくらかは怪我をしているだろうと木塚は思った。

「怪我？　僕は怪我なんかしていない、僕は三の窓で靴のひもが切れた。それを結び変えていたので、蛭川よりずっと遅れていた」

「なるほど」

木塚は大きくうなずいてから、その男に向かって改めて言った。

「あなたが、靴のひもを結んで三の窓を出た時には、蛭川さんは雪溪の半ばにいた。そこであなたが落石を起した？」

「そうだ。僕が落石を起す原因を作った。ほんの一かけらにもつかないような小石が、僕の下からころがり落ちていった。すると、その小石が、一つ一つの石に魔術でもかけているように、ことごとくの石を呼び起したのだ」

「勿論、落石とかケヤーとか叫んだでしょうね」

えっというような顔をして男は友人の死体を背にして立ち上がって、初めて木塚の顔を見た。山男にしては瘠せていた。色も白かった。友人を失ったために気が転倒したのか、いくらか顔がゆがんで見えた。なにか言おうとして、すぐには言葉にならない顔だった。

「僕等三人は眼の前の剣尾根のドーム壁の上に居た……あなたのケヤーの呼び声は聞きませんで

したね」

「確かに僕はケヤーを叫んだ……いや叫ばなかったかも知れない。そうだ、なんにも言わなかったんだ、あまり突然だった。石が僕の靴の下からころがり出すと……」

男は前と同じことをまたしゃべり出した。

「いいんです、なんにも僕はあなたをせめているわけではありません、ただ僕はあなたのケヤーの声が聞えなかったと言っているだけです。叫んだとすれば充分に声のとどく距離にもかかわらず、僕には聞えなかった……」

「鈴島君のケヤーの声は、小窓頭に居た僕の耳にはちゃんと聞えていたぞ……」

霧の中から声がした。登山家にしてはやや肥り過ぎた男が、近よって来た。赤いチェックの胴着を着ていた。

「陣馬君、えらいことを僕はしでかしてしまった。蛭川は落石で死んだ、僕の靴の下からころがり出た一かけらの石が……」

「聞いていた。君の声は霧の中を通ってどこまでもつつぬけに聞える。……ここは池の谷だ。落石はこれだけではすむまい、これ以上遺体を傷つけないように、岩かげに運ぼう。これからしなければならぬことがいくらかもある……」

それから陣馬は木塚健の頭から足先までじろりと一瞥^{いちべつ}して、どこに居たのかを聞いた。ドームの上に三人でいたと答える木塚に、更に所属山岳会と木塚の名前を聞いた。

(気障^{きさ}な野郎だな)